

## ◆ 今週のコメント

- ・ 咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.51(21例)で、第37週から減少傾向にあるものの、第38週としては過去5年間の中で最も多い報告数となっています。

## ◆ 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

RSウイルス感染症の定点当たり報告数は1.61(66例)となり、第34週(8月18日～8月24日)以降5週連続で増加し、本年度で最も多い報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

## ◆ 全数把握対象疾患の追加, 変更について

平成26年9月19日から、「カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症」及び「播種性クリプトコックス症」が五類感染症(全数報告)に追加されました。また、五類感染症の届出基準が一部変更され、「水痘(入院例に限る。)」及び「薬剤耐性アシネトバクター感染症」が全数報告対象疾患になりました。

なお、水痘は小児科定点による定点把握疾患ですが、入院例のみ全数把握となり、薬剤耐性アシネトバクター感染症は定点把握疾患から全数把握に変更となります。詳細は下記ホームページをご覧ください。

○厚生労働省ホームページ「感染症法に基づく医師の届出のお願い」

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou11/01.html>

## ◆ 発生状況

### 全数把握の感染症

ありません

### 定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

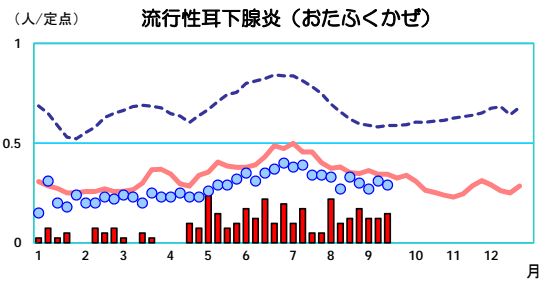
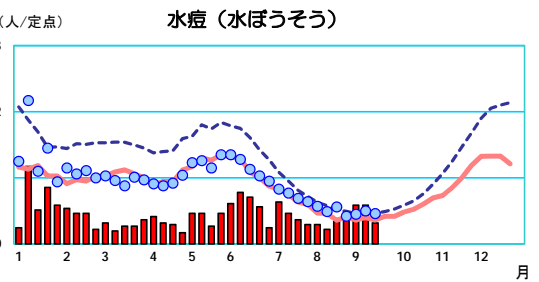
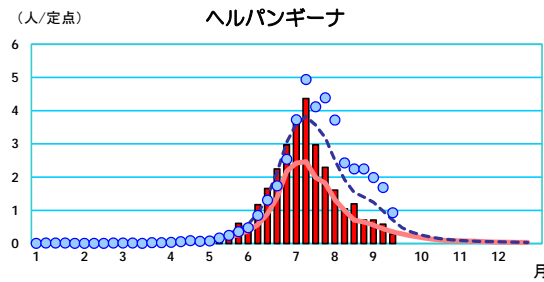
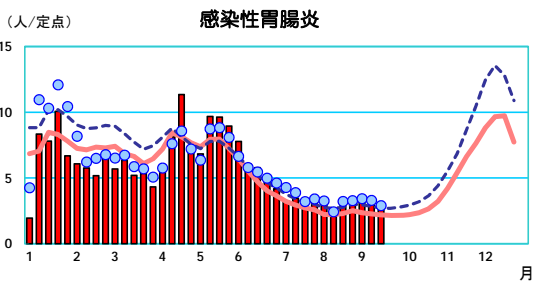
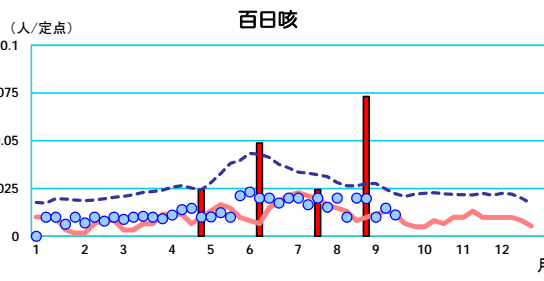
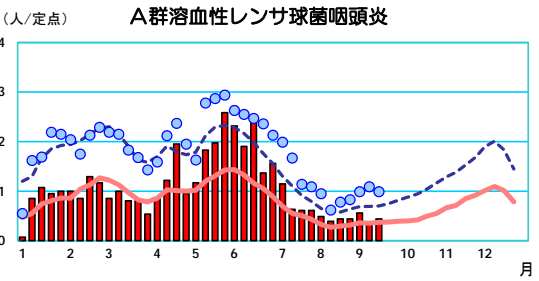
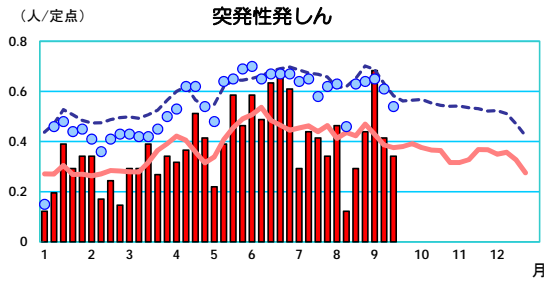
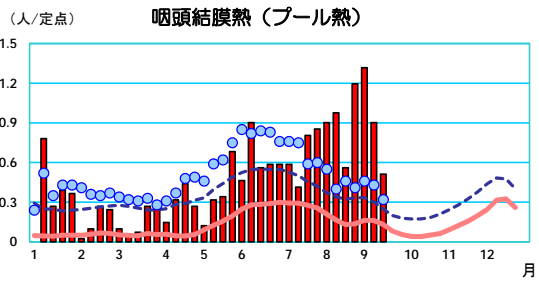
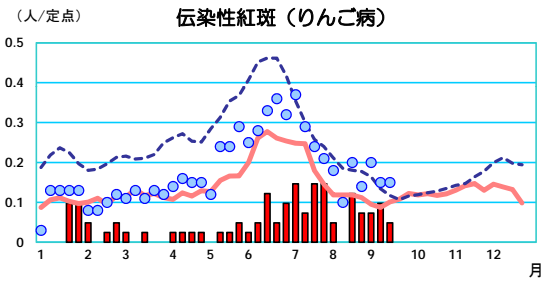
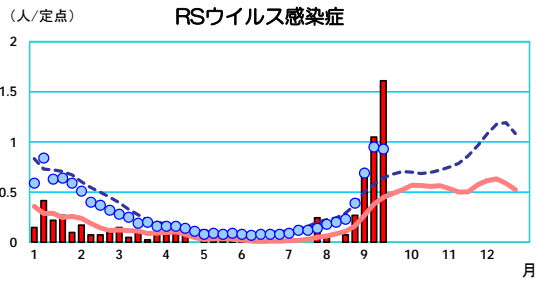
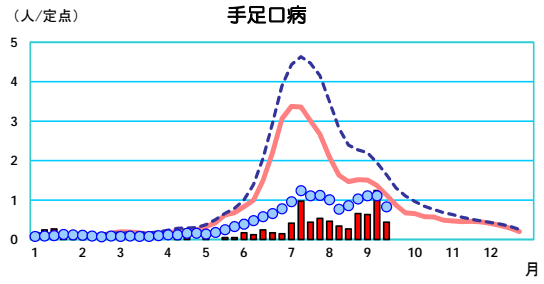
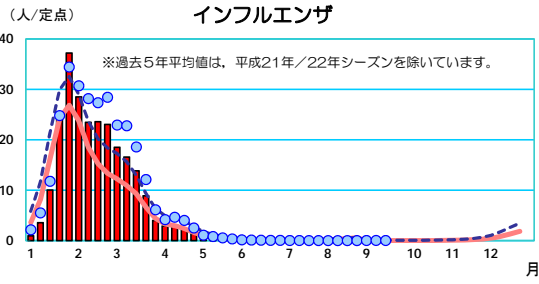
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.95	121
	② RSウイルス感染症	1.61	66
	③ 咽頭結膜熱	0.51	21
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.44	18
	④ 手足口病	0.44	18
眼科	流行性角結膜炎	0.20	2

## 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

(注) 京都市のデータは、平成26年9月25日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。  
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

# インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



## 第38週(9月15日～9月21日)トピックス: <RSウイルス感染症>

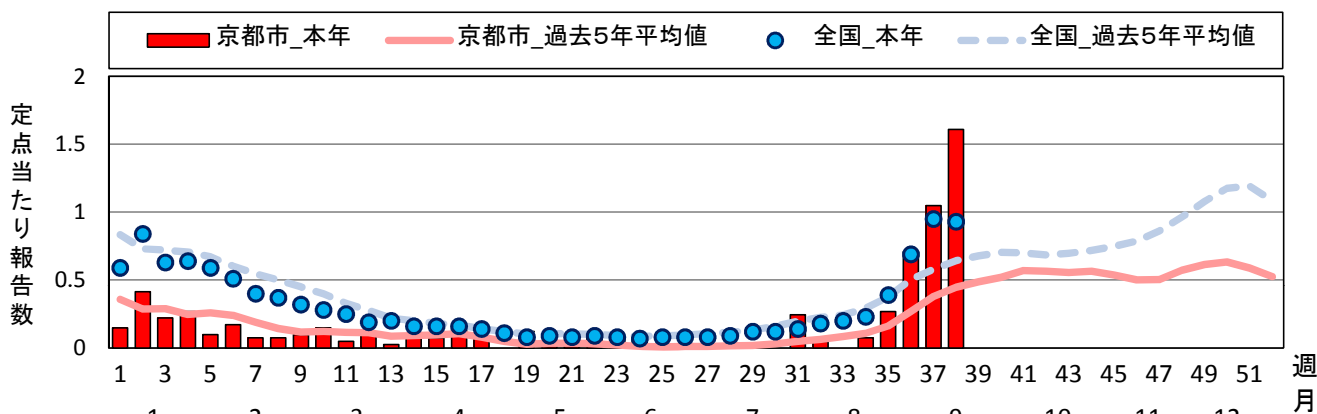
RSウイルス感染症の定点当たり報告数は1.61(66例)となり、第34週(8月18日～8月24日)以降5週連続で増加し、本年で最も多い報告数となっています。また、「感染症法」において定点把握対象に指定された平成16年以降、最も多かった平成24年第40週(10月1日～10月7日)の1.49(61例)を上回っています。

平成22年まで秋から冬にかけて流行していましたが、平成23年以降、夏頃から明らかな増加傾向がみられ、本年も8月下旬頃からRSウイルス感染症の患者数が急増しています。

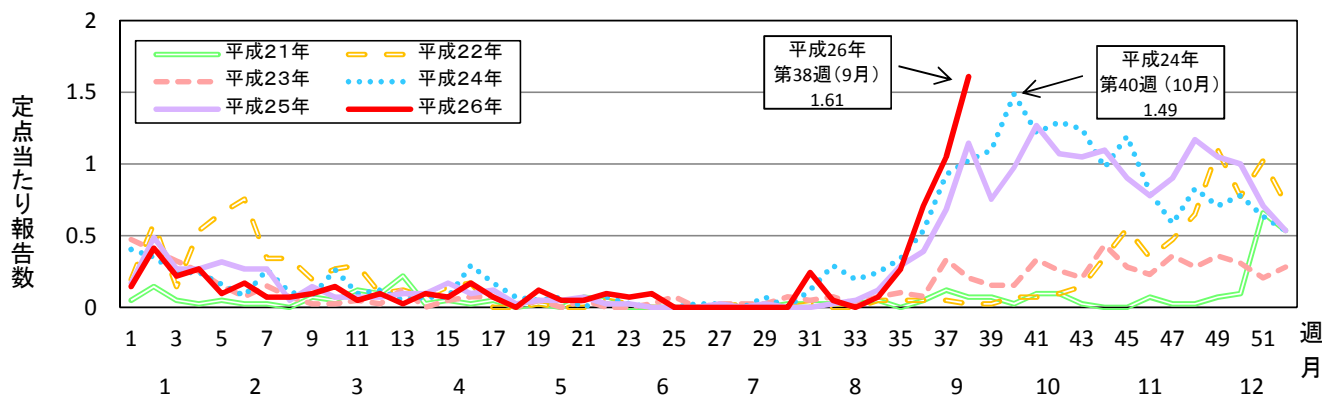
RSウイルス感染症は、年齢を問わず再感染をおこしやすく生涯にわたって感染を繰り返し、多くの場合軽い症状で済みます。しかし、乳幼児期においては重要な疾患であり、特に早産児や心臓・肺に疾患のある乳児、生後数週間～数箇月間の乳児では、細気管支炎、肺炎といった重篤な症状を引き起こすことがあります。

本年第38週までの報告例でみると、年齢階級別では1歳が104例(37.4%)と最も多く、次いで6箇月～11箇月 77例(27.7%)、0箇月～5箇月 55例(19.8%)の順となっており、1歳以下が全報告数の約85%を占めています。咳などの症状がある年長児や大人は、可能な限り0～1歳児との接触を避けることが大切です。小児の集団生活施設である保育所、幼稚園等においては、保護者や職員を含めた手指衛生の徹底やマスクの着用など、感染を拡大させないための注意が必要です。

京都市及び全国の定点当たり報告数の推移



京都市の定点当たり報告数の推移



京都市の年齢階級別割合の推移

